
。鈍。

央 8 4

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。鈍。

【Nコード】

N9491R

【作者名】

央84

【あらすじ】

あるところに「守城^{かみしろ}」という家がありました。
その家に生まれた子は、成人になると剣士にならなければいけません。

剣士になることをひたすら拒む？花と、その家族とのお話。

登場人物（前書き）

ネタばれあり。

でも、最小限に抑えています。

登場人物

主人公・守城？花 もりしろりゅうか

次女／14歳／3年4組

反抗期真っ盛りw

引きこもり（更生するのは参刀）。

家の掟と兄の錮皇が嫌い。

守城家

長男・錮皇 こおう

25歳

堅苦しく、真面目な性格。
重度のシスコン。

次男・？ かなと

20歳

錨と二卵生の双子。

女装壁がある。

おっとりとした、柔らかな性格。

三男・錨 いかり

？と二卵生の双子。

ドがつくほどのS。

？と一緒に別居中。

長女・？

18歳

超がつくほど頭がいい。

表向きは学者として、大学で働いている。

学校

○教員○

理事長・白谷藍季しろやあいき

25歳／男

優しく、紳士。

錮皇とは、腐れ縁で犬猿の仲。

家族ぐるみで、守城家と仲がいい。

保険医・字神紫煙あざかみしえん

25歳／男

元・不良。

錮皇とは親友であり、

藍季と錮皇の喧嘩が止められる唯一の人物。

教師・太刀渡安曇たちわたりあずみ

27歳／女

テンションが無駄に高い帰国子女。

英語交じりで話す。

○生徒○

錮崎仁也きりさきじんや

3年4組／男

俳優もこなす、アイドル。

成績はともよく、常に学年トップ維持。

水谷夕暮みずたにゆうくれ

3年1組／男

女っぽい外見をもつ、男。

面白がって、女装& a m p・女口調で話している。

初刀

私のお家では、生まれた子を剣士として育てるといつしきたりが
ございます。

また、名前は金がつく名前しかつけてはならないのです。

そして、成人を過ぎたなら、

剣士として、誰かに雇ってもらい、
人を斬るのです。

「そーんな掟、ぜえったい守らないからね!!」
りゅうか
「?花!!」

そんな掟、古すぎる。

私は私らしく生きたいし、剣士なんてなりたくない。

「お兄ちゃん^{いせ}は真面目すぎるのよ!だから^{いせ}鋼皇^{くわう}なんて堅苦しい名
前、付けられるのよ!」

「生まれる以前から決まってる!名前なんて!!」

「うるさい、うるさい!!」

これだから鋼皇兄さんは融通つてものが利かないのよ。
いい年こいて、シスコンなんでしょ!

ああ、笑える!!!

「勝手に私のいいなずけを決めたらしいじゃん！もう、我慢できない！出ていくよ！」

「いいじゃないか！一回会ってこい！」

「黙れ！お前が会ってこい！」

「そんな言葉どこで覚えた！」

「うるさい！もういい！」

思い切り扉を閉めて、私は部屋に閉じこもった。
ノートパソコンを立ち上げ、ブログを書く。

絵師になりたかった。歌い手になりたかった。
美容師になりたかった。パティシエになりたかった。
でも、私はなれない。

家が私の邪魔をする。

この「^{かみしろ}守城」という家が。

長男は、頑固で融通が利かない。

二男は、女装壁のある変態。

三男は、優しいけどホントはドSな腹黒。

長女は、とても頭がいい学者（兼剣士。）

そして、次女のアタシ。

みんな剣士になっていった。

みんな人を殺した。

だけど、あたしだけ違う。

あたしは、人を斬るところか、刀を握ることすら怖い、

ただの鈍^{なまくら}だ。

初刀（後書き）

いわゆる処女作っていうやつでしたw

誤字・脱字・感想等、お気軽にどうぞ！

式刀（前書き）

自分を鈍刀なまくらだという？花りゅうか。

なんとか？花を“剣士”として一人前に育て上げようとする兄・
鋼皇こうおう。

そんな中、守城家に次男と三男が帰ってくる。

兄と妹の式刀始まり始まり♪

式刀

ピンポーン。
ピンポーン。

インターホンの音が家に鳴り響く。

午後5時。

つまり、17時。

守城家^{かみしろ}にお客が来たみたいだ。

「はい？」

錮皇兄^{こおう}ちゃんが出たみたいだ。

私はこたつでみかんの皮を剥いた。

どたどたと、せわしない足音が近づいてくる。

その途端、ガラツと居間の戸が開いた。

「？花！早く逃げるぞ！！！」

あの二人が帰ってきた！！！！」

錮皇兄さんが、あわてている。

が、それも虚しく居間の戸をこじ開けて
その二人は入ってきた。

「いかり 錨兄さん！？兄さん！
かなと

お久しぶり！！！」

みかんを差し出しながら手を振ると、錨皇兄さんがその手を払い
のけた。

「なにすんのよ、錨皇兄さん！」

「あいつらは教育に悪いから、中学生が見ちゃだめだ！」

「もう高2ですけど？」

すんなりと言葉で払いのけて二人の方に行く。

相変わらず、錨皇兄さんと、二人は仲が悪いみたい。

女装壁のある？兄さんと、

腹黒ドSな錨兄さんは、二卵生の双子で同居している。

女装も似合ってたてきれいな？兄さんや、

いろいろ教えてくれる錨兄さんは、小さいころからとても好きだ
った。

「おー、相変わらずチビだな、？花」

「なんてこと言ってるの、気にしちゃダメだからね、？」

「うん、兄さんたちも変わって無くて良かった！」

「僕はー、兄さんより姉さんとか、かなって呼んでほしいけどね

」

「おかま・・・黙れ男女」

「ははっ、見てわかれよーw」

錨兄さんと？兄さんの挟まれて、三人で話をする。

「そういえば、？！学校行っていないんだってね」

「俺らだって、授業妨害しかしてなかったけどな」

「・・・だって・・・。」

私はごもって口を閉じた。

「ダメだよ、ちゃんと行かなきゃ。」

なんか行きたくない理由があるの？ほら、カツアゲされたとか？」

「いや、カツアゲってねえだろ、今時。いじめとかじゃね？」

「剣士に、

剣士になりたくないから。」

ついに打ち明けた。

「はは、それは、無理、、かな？」

「諦めろ」

口々に兄さんは言った。

「な、なんで！！おかしいじゃん！」

私は気付くと叫んでいた。

そして、また今日も、

部屋に閉じこもって一日を過ごしていた。

式刀（後書き）

引きこもり？花になっちゃった。

個人的には、錨兄さんの性格が自分に似てると思います。
で、？兄さんは好きな性格です。
こんな双子がいてもいいよね？

参刀（前書き）

守城家に次男と三男の双子コンビが帰省したそうです。

だけど、？花は今日も引きこもる。
りゅうか

剣士なんかならない、学校も大嫌い。

ほのぼの系引きこもり阻止物語。

参刀

「おい！？花！出てこい！」

耳障りな錮皇兄こおうさんの声。

そうやって、いつもあたしを追い詰める。

この家も、錮皇兄さんも、ぜんぶ、ぜんぶ、

だいきらい。

扉の前から聞こえる、誰かの声。

「嘘よ、私は逃げるために・・・」

『その意思はあなたのものでしょうか?』

「違う、違う、ちがう、望んでない。」

『言い訳するなよ、ねえ?』

「黙れ、何を、何を分かった気になって・・・!」

『逃げることは、回避すること。』

あんだ、何も考えてないじゃないか。』

声は、それを言っで消えた。

私は、あたしは、私は・・・。

どうしたかった?

「おはよう、兄さん達。朝食は?」

「え???花?」

「何?錮皇兄さん。早くしてよ、時間になるじゃない。」

「あ・・・、ああ。」

食卓を囲む美味しそうなパン。

色とりどりの野菜のサラダ。

初めて・・・いや、小学生以来の朝ごはん。

「?兄さん、昨夜はありがとう。」

恥ずかしそうにうつむいた。兄さんの顔は笑っていた。

参刀（後書き）

脱・引きこもりな？花ちゃんでもよかったです。
きっと、？兄さんは元引きこもりです。

どーでもいいけど、錨兄さんがしゃべってないや。

やっぱり朝はパン派の作者でした。

死刀（前書き）

脱・引きこもりおめでとうな？じゅうか花。
今回から、ゆるい学園物になっちゃいますw

死刀

今日から、中学校に通い始めます。

・・・3年だけど。

「ちょっと。兄さん。」

「・・・なんだ？」

何でついてくるのかなあ。

「愛する妹の初登校だろう？」

「うつさい、黙れ、死ね。」

「そんな言葉づかいするんじゃない!!」

「じゃあ、死んでくださる？お兄様？」

わざとらしい泣いたふりをしながら、兄はついてくる。

・・・ホント、シスコンって嫌だよね。

「こつち、こつち!? ちゃん!!」

「あ・・・えと、理事長!!」

「もう、昔みたいに藍^{あいぎ}李^りって呼んでもいいのに!!」

「じゃあ、藍ちゃん!!」

フフフと、二人は笑いあふ。

ちら・・・と、横目で錮^こ皇^{おう}兄^{けい}さんを見ると、凄^こく不^ふ機^き嫌^{けん}そう。

だって藍ちゃんと、お兄ちゃんは・・・。

「おい、白^{やひ}谷^こ。てめえ、?花と話すんじゃないよ。」

「いつになっても、君は言葉遣いが悪いな。」

「あゝあん!? ぶざけんじゃねえよ! お前が理事長なんて分かって

たら、この学校に入学なんかさせてねーし。」

「じゃあ、僕も君を不法侵入と認めて、警備員を呼ぼうか。このシスコンが。」

「くそ、本性表しやがって。こんな腹黒い理事長で大丈夫なのか？この学校は！」

ペラペラと早口でお互いの悪口を語るこの二人は、何を隠そう同級生だ。

私の兄・守城鉤皇と、この学校の理事長・白谷藍季。

家族ぐるみで、守城家と白谷家は仲が良く、誕生日もちょうど1カ月違いのこの二人。

小さいころから仲が悪く、一緒にすると毎回喧嘩していたそう。極めつけは高校時代に風記委員会VS不良で全面戦争を起こしたらしい。

そんな二人だ。

「藍ちゃん、私の、クラスって？」

「ああ、3年4組だよ。」

「じゃあいくね！ありがとう。」

軽く走りながら、昇降口まで行く。

はあ……。団体行動とか、苦手なんだけどな。

この学校は、一日一時間・実戦練習があるそう。で、死傷者が絶えなく出ているらしい。

私は、こんな学校でやっていけるの……。かな。

教室について、自分の席に座る。
周りがザワザワしている。

あ、そうか。私が来たからか。

その途端、ビチャッと、液体が顔にかかる。
不思議に思い、顔を拭くと手は赤。
目の前には、半死人と男。

「オイ。その女。名前は？」

切れちゃっていいですか。

俺様なのは、兄貴だけで十分だっつーの。

「おい、俺が聞いてるんだから・・・」

「何様だ、あんた。自分から名乗れよ。」

はは、相手がポカンとしてるや。

ドSな兄貴のおかげで、私、口だけは強いんだw

「は...？俺を知らねえの？」

「...？うん。っていうか、話し方なれなれしい奴嫌いだし。」

ははははと、男は笑って、私の方を見る。

「きりさきじんや 錐崎仁也きりさきじんやっていうんだ。それは失礼。」

え……？
錐崎仁也……だって……！？

。

死刀（後書き）

錐崎さんの正体は次回で。

白谷理事長とお兄さんは書いてたのしすぎる！

誤刀

きりなきじや
錐崎仁也。

学生アイドルとして有名で、ジャニーズ所属。
俳優の仕事もこなす、売れっ子芸人…

が、目の前にいる。

しかも、殺傷事件を起こしてる。

「ななななんで!？」

「は?意味分かんねー。」

ははは、と軽く笑って受け流す。

「めんどくせえ事に、この学校、学年首位が学校案内しなきゃいけないんだよな。」

「はあ。」

「ほら、ついてこい!!!」

腕を掴まれ、ふらふらしながらも、錐崎さんについていく。

「ここは、3年塔だな。1〜12組まであるんだ」

「はい」

「この下は2年塔、でその下は1年塔。」

「はあ…」

「じゃあ、次は教室塔じゃなくて、別校舎に行こうか。」

「保健室からで」

第2校舎1階 保健室。

「おー、錐崎。また殺ったのか。」

「はいはい、うっせーな。あ、こいつ保険医の字神あざかみな」

「はじめまして。守城もりしろりゅうか？花です」

「あーあー！なんだ、錮皇こおうの妹？」

「はい、そうです！」

「久しぶりだなー！あ、おぼえてない？紫煙しえんだよ」
「！！！！」

字神紫煙。

錮皇兄さんと藍ちゃんと同級生で唯一喧嘩を仲裁できる人。

「紫煙さん！」

「知り合い？」

「黙ってな、錐崎。久しぶり、？花」

「錐崎さんって、いつも殺ってるんですか？」

「あ、仁ってよんで！」

「お前：そんなことしたら、理事長に停学にされるぞ……！！」

「いや、いいですよ？じゃあ仁？」

「まあいつもの事だよな？字神？」

「そうだが…、お前ら、時間…」

「「あ！！！！」」

走って、教室に戻る。

なんだか。友達が出来てよかったなっ♪

「ああ、もうなあ…。シスコン共―《藍季と錮皇》にはどう説明しようか…」

保健室で、手当てをしながら咳く保険医を別に陽は暮れていった。

。

麓刀

一時間目は、国語。
二時間目は、数学。
三時間目は、社会。
四時間目は、英語。

ここまでは、普通の学校通り…

だった。

「あの、仁さん？次って…？」

「？ちゃん、友達いないの？あと、仁でいいって！」
「いないですよ？すいません、癖なんですよ」

嘘です、癖なんかじゃないです。

クラス中の女子からの視線が痛いからです。

「昼からは、実技なんだけど…」

アレ？

仁さんの後ろ…

スパンー！！

「痛ッてエー！」

「なあに女の子たぶらかしてるんや！仁也っ！」

「違うって！ほら、不登校してた〜！」

え？誰誰？

スゴイ美人さん…で、関西弁。

大和美人って感じで、色白長髪で…！

「ああ！もりしろりゆうつか守城？花さんやね！」

「はい？ええと…？」

「僕は、みずたにゆうくれ水谷夕暮ゆうんよ！大阪生まれやねん！よろしくなあ！」

ん…？僕…？

「おい、夕暮…。ふざけんな！お前も男だろ！」

「なにゆうてるん？僕はどー見たって男やろ？」

「ええと…？」

夕暮さん、どう見てもセーラー服で、この学校の女の子の制服な
んですが。

「ちなみにな、僕は3 - 1やから！いつでも来ていいで？」

「はい！」

「やったな！これで友達増えたわあ！」

スゴイ上機嫌ですね、夕暮さん。

「これで、次のバトルシップにでれるなあ！」
「何いってんだよ！？コイツと組む気か！！」
「じゃあないやろ！3人1組なんやし！」

あれ？なんか…。

話が全然読めませんが。
バトルシップ？何それ…。

「仁也、知らへんの！？？花淒いんやで！」

「あの、話が…！話が全く分かりませんが！」

「お前は後回し！何いってんだ夕暮！不登校がスゲえわけねえだろ
！」

軽く傷ついたんですけど。

ねえ、後回し×不登校がスゲえわけねえだろ！のダブルパンチは
酷くないですか。

「5歳のころからずっと、二刀流部門で優勝してるんやで？」
「ほう…」

あの。

怖いです、仁さん。

兄貴に負けず劣らず、怖いですが。

だから…！

その目を止めてくださいってばあ……

o

斜刀

「あの…、なんで人の黒歴史を…」

「もちろん、調べたからに決まってんやろ！」

「いやいやいや。」

「ドヤ顔やめてください。」

「こいつ、情報屋ができるほどスゲえ情報持つてるから。」

「アカン！こつゆー時は、僕からばらすんやろーが！」

「うっせ。」

「いやいやいや。」

「どうでもいいです、激しくどうでもいいです。」

「あの…、欠場します」

「ダメだ」

「話聞いてください…。」

—

「はぁ？人が斬れない？」

「そうですけど…」

「開き直んじゃねーよー！！！」

痛い、暴力反対です、仁さん。

「ちょっと待て…。じゃあ去年は？」

「情報屋さんに聞けばいいんじゃないですか？」

ツンとして、違う方向を向く。

「分かった。」

「え…？」

「俺がお前が斬れない分まで、他の奴らを斬る。
それでいいだろう？」

。 なんか、仁さんがかつこよく見えた。

斜刀（後書き）

（ a f t e r ）

夕暮「情報代、ちゃんと払いい！」

仁也「知るか！」

夕暮「ちょ……！？ちゃん！^{りゅう}仁がセクハラするねんっ……！」

？花「え……（引き）」

仁也「違う！誤解だ……！！！」

そっぴゃ、一応イケメソ設定なのに残念な仁也さん。

鉢刀

今日も絶え間なく。

キヤーキヤーという歓声と。

私に対する悪口が。

聞こえているんだけど…。

「なあなあ、？ちゃん^{じゅう}“二刀流”って重くあらへん？」
「ばかじゃねーのか、夕暮^{ゆぐれ}。重いわけねえだろ、な？」

いやいやいや。

この学校の人気組が、私に話を振らないでください。

ってゆーか。

なら！不登校なんてしなかったらよかった…。って今さら後悔します…。

「それはですね、太刀と違って重さを二つに分散させてるんです。
慣れるまでは少し重いですが。」

「そうなんか…！」

くしゃくしゃと、頭を夕暮さんが撫でてくる。

ああああああ！

そのたびに親衛隊？wの方の視線が…。

「じゃ。俺らは、行こっか。」

「…？ああ！次移動でしたっけ！」

トタトタと仁^{じん}さんの後を走って追いかける。

「あー、仲のいいことで。」

「紫煙^{しえん}さん！」

「あ、不良保険医。」

「黙れ仁。」

早くも火花を散らしている二人を横目で見て、

これが犬猿の仲というものなのかって、始めてじゃないけど理解しました…。アハハ…。

「なんですか？紫煙さん？」

「ちよつとな、理事長が呼んでる。仁もだ。」

「は…！？俺も？」

「ざまあみるw」

「保険医殺す…！」

「ダメですよー、仁さん！」

なんとか仲裁に入って、妨げる。
でも、呼び出して何だろう？

「仁さん！早く行きましょうよー！」

「あ…、ああ、わかったって！」

ぐいぐいと引っ張って理事長室まで連れていく。

何もしてないのに呼び出されて…。

いったいどういふことなんだろ。

。

休刀

「藍ちゃん…、あの、話って…?」

この学校の理事長室が（珍しく）緊張した空気に包まれる。

「…おい。理事長?」

あの、仁さんが驚いてるくらいだから、きっと珍しいんだろう。
まあそれは、日常生活からも伺えることだろうけど。

「なあ…。仁也。」

「は?俺?」

ようやく理事長は、閉ざしていた口を開いた。

「なんでそんなに?ちゃんと仲が良くなってる?」

「は?え…?」

えつと…?藍ちゃん?意味がわからな…

「俺だつて、?ちゃんとなら毎日いちゃいちゃしてーよ!」

キャラが崩壊してます…よ…。

コンコン。

「おい、あいぎ藍季。」

「なんだよ紫煙しえん」

何故か、なぜか、なぜか。

紫煙さんが理事長室に入ってきた。

「何を言っただ。っーか呼び出して…。」

「これは立派な不純異性交丫」黙れ」

「ほらほら。帰った、帰った。」

「ちょっと待って！あ、イタイイタイ！ごめんなさい紫煙さん！」

かるくキャラ崩壊してますね、藍季理事長…。

「結局何だったんでしょうか…、仁さん」

「えー…。ああ、まあ…。」

「???」

「知らない方がいいこともあるって事じゃね？」

意味がわかりません。

充刀

「あの、仁さん？何の話だったんですか？
っていうか、何がわかったんです？」

「…鈍いな…。自分で考えてみな」

ええええええ！？
そんなこと分かりません！

「じいんっ！りゅっうちゃーん！」
「きゃ！」

夕暮さんが空気を切るように私に抱きついてくる。

「おい、はなs「あのね！自分らトーナメント見はった？」

「……（イラッ」

「え？もう貼り出されてるんですか？見ましようよ、仁さん！」

「？花誘ってる？」

「????なんですか、ソレ？」

「いや、別にいい」

何故か赤面する仁さん。

「きゃ！此処に変態がいるさかい」

「うぜえ！夕暮！！！」

で、肝心のトーナメント。
の前に。

「一時予選あるんやなあー…。」

「知らなかったのかよ」

「なんやて！僕が知らなくたってもええやろ！」

ということだ。

とりあえず、今日終了なわけですよ！

「お！おかえり」

「ん。」

錮皇兄こおうさんがエプロン姿で出てくる。

「今日、カレーだぞ」

「昨日の残りね」

挨拶（？）を済ませると速攻で、部屋に潜りこみパソコンをつける。

明日からなんか楽しみだなあ…。

.

拾壹刀

「うう…、緊張するよ…」

ついに今日、バトルシップが始まる。

学年別に競う、このバトルシップ。

3年だけで31チーム、合計93人の参加者がいる。

なんで、私たちの方だけ視線が集まっているかというと。

不良の中の不良、でも成績優秀なアイドルきりさき じんご錐崎仁也と、
見た目は女の子だけど実は男で、ガンマン天才銃士の水谷夕暮が
一緒にチームにいるからであって…。

「まあ、楽にやろうぜ」

「?ちゃんを傷つけよう奴は、僕がフルボッコにしはるから心配せ
えへんでなっ!」

「…、うん!」

二人とも、目が。

目が笑ってないんですけど。

というわけで！

総勢93人のバトルシップスタート！！

…なんだけども。

「あー、保険医の字神^{あざかみ}だ。

今回理事長に代わって、第一次試験の内容を話す。
第一次試験は…」

皆がゴクリ、と息をのむ。

「コレを取ってこい。」

と、紫煙さんが手に持っていたものは、
耳にハートのアクセサリーが付いている猫、だった。

。

拾壹刀（後書き）

とうとうバトルシップ編に突入しました。

キャラクターの名前がたくさん出てくるのは、準決勝（第二次試験）からの予定です。
考えるぞー！

拾式刀

いよいよ始まった“バトルシップ”

だーけーどー…。

「聞いてない！聞いてませんよー！！！！！」

一次試験（＝一回戦）は…。

ハートのアクセサリーをつけた黒猫を捕まえてくる事だった。

「むう、スカートつて動きにくいわぁー、えい！」

「ゆゆゆ夕暮さん！？」
ゆうぐれ

「人目を考えろ、夕暮。」

「だって僕、一応男やで」

スカートを脱ごうとする夕暮さんに視線が集まる。
伊達に学校のアイドル（的存在）じゃないなぁ…。

「もちろん、短パン履いてるでっ」

うわぁ…。今ので何人の追っかけの心が折れたか…w
フツと軽蔑するように笑って見た先には…。

「あ！あそこ！仁^{じん}さん！」
「おう！」

走って向かった先の猫が…。

「え？飛ん…！？」

M・A・S・A・K・A

。

拾貳刀（後書き）

ギャグっぽく書いてみたけど、普通よりかなり時間がかかりました。

向いてないって感じですね、はい。

拾参刀

みんなみんな“飛ぶ猫”めがけて走る。

体術に優れたものはここぞというように、走る。
戦術に優れたものは、すぐさま戦略を練る。

私かというと。

何故かバカ兄さん細星に日頃鍛えられていたから、意外と体力はあったのだけど…。

休憩、休憩。

高い所（多分校舎）に登ってみる。

落ちついて息を吸って、吐いて。

改めて観察をしてみる。

よくみると、この猫……。

後ろにバックステップするときに、

ハートの形が丸になって——！？

やっぱりそうだ。

大きくまた息を吸う。

そして、校舎から飛び降りる。

猫を追いかけて、ポイントを忘れない……！

で。

捕まえられましたっ……！！

。

拾死刀

一次試験も終わり、私はいったん泊まることになった寮の部屋で休む。

寮というよりも、普通のビジネスホテルに近い作りになっているその部屋は、豪華で広い。

二次試験からは、いよいよ実戦。
つまりは“殺し合い”で、死者が出てもかまわないみたい。

いつも丹念に手入れしてある、二つの剣をそつと触る。
人を斬れなくなった、剣士として“鈍”なまくらな私が握る剣。
長い方を「蒼零刀」そうれいとう、短い方を「想朱刀」ししゅとうと、銘柄が打ってある。

そつと、その刀を撫でる。

『あの』事から。

私は刀を握るだけで恐怖するようになった。

「なんでかな…。」
頬を涙が伝う。

『あの子』は、殺してしまった。
唯一のライバルで。

とても優しくて…。

涙を拭って、目をつぶる。

もう、寝ないと…。

・

『あの日』巻

？花^{りゅうか}、5歳。

小学一年に上がる・またはなった記念の年。

その年の4月1日。

その日こそが、悲劇の『あの日』…。

「おにいちゃん、今からなにをするの？」

「大会だよ、?!」

「なにの?なにの大会？」

「…、何って…、もちろん戦闘の…」

「おにいちゃん！優勝してくるね！」

そしたら、りゅうのこと、褒めてくれるでしょ？」

「…ああ。」

死すらありとする、真剣勝負^{まじしう}の子供部門。

それに参加することは、守城家^{もりしろ}でできまっている家訓^{けつん}。

？花は、偶然か。それとも必然か。

優勝まであと一人の所まで勝ちぬいていた。

その時、一生後悔することを起こしてしまったのだ…。

「はじめまして、守城？花です。歳は5歳だよ！よろしくね」
「あ、僕は粕谷優^{そめやゆう}…。5歳だよ、よろしく…。」

相手は優くんってゆー子。

なんでか知らないけど、勝ち残っちゃった！

でも。これに勝てば、鎧皇にいちやん達に褒めてもらえるや！
がんばろーっと。

「ready…。go…！」

勢いの良い審判の合図とともに、飛んで優くんに斬りかかる。
優くんは、私の剣をうまくかわし槍で後頭部を殴ろうとする。
その槍を長刀で止める。

（中略）

20分も続くと、さすがに体力が限界近くで、私はフラツと傾きかけた。

その瞬間を見計らって、優くんは槍で私のお腹を突いた。

衝撃でステージの壁まで飛ばされ、カウントがはじまった。

『あの日』巻（後書き）

今更ながら、携帯で見ると？花の？の字と、？^{かなと}の字が？になって
ますね……

りゅうは、金留↑

かなとは、金質↑

結構気に入ってるので、出てこないのが悲しいです……

『あの日』は、結構重要なキーパーツですので、ゆっくり読んで
いたださいね！！

『あの日』式

壁まで飛ばされて、血を吐いて倒れる私。
口から血が伝う。

なんか、兄さんが叫んでるや。
負けたら褒めてもらえない。
だから、勝ちたい。

負けなんて嫌。

勝ちたい——！

つぎの瞬間。

“^{りゅうが}？花”は？花じゃなくなった。

？花、いや“？花だったであろう人”は、体の上に乗った瓦礫を
素手で粉碎し、どこからか出した短剣^{ナイフ}を手に取り立ちあがる。

周りの観客からすれば、『5歳の女の子』がそんな事ができるはず
ない。

否、アレはきつと違う人間と言ったところであろつ。

答えはどれも、no。

アレは、『只の5歳の女の子』の能力だ。
その能力を―【七^つ大罪】

『あの日』式（後書き）

能力とかけつくと、厨二くさくなりました！

あ、でも元から厨二病だ！

【七大罪】なので、もっとっていうか七つの人格＋原罪^{りゅつか}って感じになります！

さらっとネタばれ！

『あの日』参

？花^{りゅうか}の能力、【七大罪^{つみ}】。
今出ている能力は得体が知れない。

黒かった髪は白くなり、
目はツリ目になり、歪んだ笑いを含んでいた。

“？花”は怯えた優を見つめると、優の直前まで跳躍、さらに頭を片手で掴み上げた。

「う…ああ！う…っ！！！」

怖さのあまり、悲鳴交じりになった優の声が漏れる。

「坊ちゃん、遊びましょお…？」

歪な笑いでククク…。と笑う“？花”は、微笑む素振りを見せた。

「ば…化け物め！」

優は槍を握りしめ、“？花”の心臓を狙い放った。

しかし、その槍は“？花”が前に出した左手に刺さり、止められる。

そして“？花”は、頭を掴んでいた右手を、優ごと地面に振り下ろした。

『あの日』死

メキヤという嫌な音とともに、優は地面に振り下ろされた。

「ああ、くそ…。ダメだな。頭部破壊ぐらいはよゆうだと思ってたんだが…。」

“？花”は、ぶつぶつと呟く。

審判があわてて止めに入る。

「きゅ…救護班！！今すぐ救護班を！！」

同時に、“？花”は倒れた。

白い特徴的な髪は元の黒髪に戻り、優から受けた傷が全身に戻る。

それから。

救護塔の中は、すすり泣く声が響いている。

【七大罪^{つみ}】がやったことは、まだ能力を操れていない？花にはわからなかった。

「なにがあつたの？負けたのは、あたしじゃないの…？」

と、ベットの上で聞く？花に兄達は何も答えられなかった。

ある日、リハビリがてら、散歩に出ていた？花に、優の母親が偶然会う。

会って一言言われたのは…

『ひとつろし』

拾誤刀

「また、あの声が聞こえる。
ひとごろし」

私がやったのか、それとも誰かがやったのか。
優くんは、死んだ。
なんで…？

「りゅっうちゃーん！」
夕暮^{ゆづくれ}が元気に部屋の扉開ける。
「あ、夕暮さん！」

余計なことなんて、今は考えられない。
だって、今は、その…。

「どした？恋でもしたん？キャッ！」
「い…い…いえいえっ！誤解です！」
こんなこと、言えない。
絶対に言えない…。

「そつえばね、りゅっちゃんに对战相手を教えるのを忘れてたん
や…」

はい、どーん」
「わ！つよs…「強いよ！」
え、ちよっと…。夕暮さん…。
「頭脳派チーム！？ってゆーか、ガリ勉眼鏡？

みんな頭いーんだわあ……」

ふう……。と、夕暮さんはため息をつく。

「じゃあ、全員遠距離攻撃とかですか？」

「もちもち！じゃ、僕は今日の所はお暇^{いとま}するで！」

明日、がんばろっ！」

「……はいっ！」

「よし！がんばるぞー！」

波乱万丈のバトルシップ予選開始！

拾麓刀

「lady's and gentleman！」

最注目たちわたりの3年バトルシップの開催よおつ！

司会及び解説は私！1年医療学教師の太刀渡安曇あずみよん！」

あんなテンションの高い先生がいたなんて信じられない。

…覚えておこう、と。

「今回は理事長と不良保険医にも解説としてきてもらったわよう！だから充に分に！暴れてちょうだいねえ！」

「不良保険医ってなんだよ！安曇！！！！」

「はいはい、無視無視。」

それでは、第1回戦！早くも注目のカード！

“ 錐崎・水谷・守城 ” チームVS “ 盾野たての・威早いはや・福生ふくい ” チーム
よん！」

「いやー、注目の一戦だね。」

「そうですねえ、理事長！」

錐崎・水谷の秀才コンビと詳細不明な守城さんのチームが勝つか！
もはやお馴染み！盾野・威早・福生の頭脳チームが勝つか！

「そうだね、分からないね。」

「つてお前も変わり身早ええんだよ！」

紫煙しえんさん、ツッコミ乙です。

「それでは登場して頂きましょう！」

楽しみだな、いや、怖いな。
…ドキドキする…！

「第1回戦開始です！」

拾斜刀

ピーイー！！！！！！

高らかになる笛の音でバトルシップは始まった。
いきなりその太刀で仁^{じん}さんは相手に斬りかかる。
それを援護するかのように、夕暮^{ゆうぐれ}さんは銃を撃つ。

私は少し遅れて、相手の一人に斬りかかる。

たしか、ルールは相手を地面に倒せば終了だからー！

二つの刀を使つて、相手に反撃の隙も与えず斬りかかる。

「——っ！」

相手の一人、確か福生^{ふくい}くんの撃った弾が足に被弾して、思わず後ろに下がる。

「？ちゃん！！！！ 大丈夫ー！？」

すぐに夕暮さんが福生くんの手元を狙つて、銃を撃つ。

足から大量の血が出て、『あの日』をフラッシュバックさせる。

血、血、血、血。

「？花！危ねえ！！！！！！」

仁さんの声にハツとして、剣を握る。

相手が飛びかかってきた。

相手の武器は槍。

反射のタイミングが遅かった私は、右腕に傷を負う。

飛び散る血飛沫。

赤の世界。

「●●●——！」

自分の中から声が聞こえる。

そうか、あの日も。

優くんを殺したのは私。

私であり、私の潜在能力——！

「【七大罪^{つみ}】——！」

拾鉢刀

発動と同時に、私と大罪は入れ替わる。
そう、そして…！

「痛いじゃん。」
姿も能力も。

「？ちゃん—っ？」
「？花!？」
周りはどよめく。

バキリと相手の槍を折り、驚いている相手を膝カックンしたら簡単に倒れた。

「アウトー」
周囲は驚いた眼で“私”を見る。

髪はロングで後ろに一つで束ねている。
体つきも違い、目は以前より垂れている。

今回出てきたのは、
私の潜在能力【七大罪^{つみ}】のうちの一つで、
その名を怠惰^{スロウ}という。

「…おはよう。」
あ、あららら。でももう昼かぁー…」

ふあああ、とあくびをして、怠惰は答える。

「お前、誰…！」

「怠惰は？花の中の怠惰だ…
それだけえ…」

怠惰はそういうと、相手に近づき首筋を素手で叩き気絶させた。

「…！Winner 錐崎、水谷、守城チーム…！！」

バトルシップ、第一回戦終了。

捨苦刀

一方その頃。

りゅうか
？花は、自分の深層意識にいた。

「はあい！お久しぶり、？花！
マスター

ラスト
色欲ちゃんよん♪」

ラスト
「色欲…？」

「そう、色欲。

貴方の中の整理も担当しているわよ！」

「へえ…。」

周りをぐるっと見回すと、そこには6人の人がいた。

「紹介するわねえ、」

まず、一番近くで鏡を持っている人を指差す。

自分を見て、うつとりしている。

ちなみに、縦カールですごく貴族っぽい。

ブライド
「傲慢ですわ、どうぞよしなに」

次に、その横でたくさん食べているが、太ってはいない女を指差す。

グラトニー
「暴食、よ、ろ」

ガツガツとご飯をかきこみながら、暴食が言う。

その近くで、暗い目をした男を指差す。

グリード
「あ、なんだ、俺なら強欲。」

皆を交代でみて、ため息をついてる女を指差す。

「…、ハア、嫉妬^{エンワイ}、よ。」

「最後に…、ほら、あそこ。」

鎖に繋がれた、野性を思い出すような男を色欲は指差す。

「…！憤怒^{イラ}ああ！！！！！！！！！！」

？花は全力で走り、殴った。

そして、襟をつかんで憤怒を立たせた。

「よう、久しぶりじゃねえか。」

「なんで、殺した！優、くんを！！！！」

「思い出したのか、つまらねえな」

そついうと、憤怒は軽々と？花を振り払う。

？花は後退し、構える。

「野蛮人みたいじゃねえかよ、俺が。」

『そんなわけなあいよう、いけないのは君だお』

肩にいるぬいぐるみがしゃべる。

「なん…で！！」

『僕らあは悪くはない！君が能力を使いこなせばいいのお！』

「使い…こなす…？」

「原罪、か。珍しいな喋るの。」

『？花は僕う、僕は？花だからあ…ねえ』

クスクスとうさぎのぬいぐるみは笑う。

『難しすぎたかなあ？』

そろそろ帰りなよう、

スロウス

怠惰と入れ替えにねえつ！』

「え、まだ聞きたい事…」

『僕らはいつでも君の中にいるからあ、大丈夫う！』

「…！でも…！」

『早く行かないとお、君の友達が心配してるよう』

不気味に微笑んで、ぬいぐるみ改め原罪はゲートを作り、私をその中に放り込んだ。

式拾刀

目を覚ますと、前には仁^{じん}さんと夕暮^{ゆぐれ}さんが居た。
二人とも、らしくない不安げな顔を浮かべている。

「どうしたんですか、そんな顔らしくないですよ？」
「ふあ…？ ちゃあああん！！」

夕暮さんがベツトにダイブして私を抱こうとしたところを、仁さんが夕暮さんをつまんで、止めた。

「その、悪かった…な。」
「いえ、大丈夫ですよ！ 記憶も戻りましたし！」

そう、記憶。
そして深層意識で掴んだ潜在能力【七大罪^{つみ}】、も。

「だから、泣かないでください。
もう、足手まといになんてなりませんから！」

私は苦しそうに見る二人に笑って見せた。

式拾壹刀

「ふ、ざけんなよお前らああ!!!!」

「なんだ、いつかの不法侵入者。」

「黙れ、藍季。^{あいき}そして死ね」

「君こそ敬語を使ったらどうか？野蛮人が」

理事長室では、犬猿の仲コンビの火花がバチバチと散っていた。

「はいはいはい、stop! 止まりなよ、鋼皇^{こほう}ちゃん！」

「黙れ、安曇^{あずみ}っ！」

「喧嘩はよくねエぞ」

「く、そっ！」

鋼皇は、藍季に掴みかかっていた手を放しバンツと、机を殴った。

「知ってるだろ！お前らも！」

「^{りゅうか}花に潜在能力なんて使わせたら『あの日』の記憶が……！」

「好都合じゃないか。」

「つメエ！」

藍季を鋼皇が睨みつける。

「知ってるだろ、この学校の卒業者なら。」

バトルシップはただの戦いごっこじゃない。

潜在能力を効率的に発動させる場所だ。」

「だが……。」

「はいはい、いい加減sister complexも卒業したらど

う？

もう隠すことがあの子の為にはならない年頃でしょ？」

「…安曇」

「ほら、お前の妹なら救護塔にいるから。」

明日ぐらいには退院できるぜ。逢いに行つてやれよ」

「うるせえ、お前らなんか嫌いだ。」

貳拾似刀

『いいのう、？う？』

「何がですか…？」

『…ん、気づかないならあ、いーかあ…』

相変わらず変な間延びした声でうさぎのストラップもとい、原罪は話しかけてきた。

私は、着替えを済ませ朝食のパンをかじった。
苺ジャムの甘い匂いが漂う。

『バトルシップのお、トーナメントどうなってるのかなあ…』
「…はい。」

夕暮さんに書いてもらったトーナメント表を原罪に渡す。

負傷者の手当てが大変なので、実行される試合は一日一試合で今日

ある試合は、

死野絶、希屋無声、愛尾不離

VS

白井唄、古田光、舩谷槊

となっている。

見に行こうかな、なんて呑気に私はソファアでくつろぐ。

そうか、私たちは明日試合なんだった…。

ふと思い出し、夕暮さんにもらったデータを見してみる。

明日の対戦相手…。

索道^{さくどう}勾^{かぎ}雪^{ゆき}、神祇^{じんぎ}八^や紘^{ひろ}、アドウッド・ハモン。
…え。不思議チームって何それ…。

『おおいー、？花^{ラスト}あ色欲^{ラスト}が呼んでるううー』

「ハイハイ、繋いでくださいー!!」

「ハロー!?!花^{マスター}!!」

明日はいよいよ試合ねっ♪」

「相変わらず陽気ですね、色欲さん。」

「んふ、いーじゃない？

^{みんな}能力全員準備は整ったみたいよ、それだけよ!」

「わかりました、ありがとうございます。色欲さん。」

戦う。

殺さずに戦う。

難しくても、殺さない。

それが私の掲げた新しい課題だった。

貳拾參刀

こつも忙しく時間は流れるものであつて、
1回戦の勝者は死野絶、希屋無声、愛尾不離となっていた。

「やっぱり。アイツらか…」

「うん…、やりずらいわあ…」

俺は、夕暮と部屋で話した。

「二回戦も厳しいが、一回戦も厳しい。くじ運ねえな…」

「うちが引いたんやないもん！

じ、仁やろお…？」

そないな目で見んといてっ！」

「はいはい…」

そもそもくじ運が悪すぎた。

？花のあの潜在能力に頼るのは、極力控えた方が良さだろう。

一回戦から、不思議チーム。

アイツらは殺りにくいし、闘いにくい。

一番嫌いな…

「はははっ、苦しむ優等生見るのって楽しいね。」

「…質^{たち}が悪い。」

生徒宿舎を防犯カメラで覗く、藍季^{あいき}と紫煙^{しえん}。

「何もかも、お前の言う通りって奴か。」

「ああ、勿論。」

「いいや、あの人が仕掛けた事、なんだけどね…」
クスクスと黒い笑みを藍季は浮かべる。

「…【錯削創^{さくせうそう}】…。」

「全く、皮肉な能力だ。」

「簡単…の間違いでしょうが。」

藍季はワインを一口、口に含んだ。

「さあ。能力開花のショータイム…だ」

紫煙は下を向いて救護塔へと歩みを進めた。

式拾死刀

「さあさあ！いよいよ二回戦目っ！！はーじーまーるーよっ」
わあああと言う威勢のいい声が後からついて聞こえる。

「さあさあ！

不思議チームVSバランスチーム！！

どちらが勝つのかなあ…？

それでは…HereWeGoっ！！」

今回のルールは、引いたカードの規定位置からスタートするとい
う、シンプルな方法だ。

ちなみに、私は校舎。

ひ…広すぎる…！

『なあなああ、う、うちらあは有利いよあ。』

間延びした声で原罪が言う。

「なんで…ですか？」

『近くに三人居るう…』

校庭に1人い、屋上に1人い、二階に1人い…は味方かあ…あ』

「わかりました！！」

現在地は一階中央階段。

1校舎（特別教室塔）と2校舎（教室塔）をつなぐ廊下の二階。

とりあえず刀をすぐ出せるように閉ま…って…

「
…」

「見つけた！見つけた！

私の相手してくれそんな強い人おっ！」

…腹話術師いつ！？

私は、すぐさま刀を構えた。

「…3年1組…番号空位。

守城？花で…す…」

「うきやきやきや！」

2組番号10…っ！ルウイ＝スツールとお」

「………神？八紘………」

…勝負っ！！

式拾御刀

勇ましい音が一階^下から聞こえてきてる。

確か下は？ちゃん…やったな。

お盛んなことで、アハハ！

上に昇ろうと私は、階段へ行く。

その瞬間、見覚えのあるシルエットが目についた。

「索道…勾雪…っ!？」

「…夕暮…ちゃん…」

「おいおいおい。」

結局俺らが最後かよ。

なあ、楽しもう、ぜ？」

「no, problem .」

僕は貴方を殲滅して終わりですカラ。」

「…ちっ…。」

ム力つく野郎だぜ…。

3年4組番号1…っ！錐崎仁也…っ!」

「3年1組No.19!!アドウット・ハモン」

此方からも、激しい爆音が鳴り響いた。

「僕らは頭脳戦と逝こうか。」

「ええ、僕、アホやで?」

「見えは張らないで結構。」

君が学力テストで学年1位なのは知ってるさ。」

「はあ、大層なことです。」

「君の知らない間に、僕は強くなったんだよ、元・世界チャンピオン」

「饒舌は結構やで。」

「ふ、まだ分からないのか?」

「【死の卓上（DEATH BOARD）】っ!!!」

式拾麓刀

あり得ない、有り得ない。

潜在能力が、こんなにも適用されている…なんて。

『さあて、さて。』

僕らの能力は何でしょうか…？』

「……………秘密」

「原罪っ…！」

『嗚呼、有り得ない…！！』

こんなに能力を開花させれる奴は、【憤怒^{イラ}】と戦って死んだあ…
優^{アイツ}だけ。』

「早く終わらせないと…！」

「チェックメイト。」

「…っ！」

「【死の卓上（DEACHB O A L D）】…かあ。

ちい…っとは楽しかったわあ…！！で。次は何するのん？」

今、ケリがついたチェス。

それ以外にも、将棋、将棋倒し、7並べ、五目将棋、こいこい、ページワン…などなどと、机の上にゲームの残骸が残っている。

「リバーシしか？大富豪やポーカー、ブラックジャックでもええで？」

「…っ！」

知能指数（IQ）200を超える天才児夕暮。
それが夕暮の真骨頂であつた…。

式拾陀刀

「おいおいおい。」

お前…、潜在能力っ…!!」

「ええ。悪いです力？」

「うおっ！」

俺は、咄嗟に相手の召喚した混合獣^{キメラ}の攻撃をかわし、話しかけた。

「…、混合獣^{キメラ}は能力じゃねえ…な…!!」

「…さア？」

俺は、背中の太刀を掴み、混合獣^{キメラ}を粉々に切り裂いた。

「…かかってこいよ」

「…No problem…」

また、刀と混合獣^{キメラ}の爪が接触して会場全体に響き渡った。

「きゃーこわーい、

ころされちゃいそう（棒読み）」

「…チイツー!!」

「いやだーあ、あ、ヤバイ。」

「色欲^{ラスト}おお…。真面目にしてい…」

「アイツ、が、来る…」

「ふっ…ざけんなあ…!!」

薙刀で攻撃するの攻撃を避けながら、色欲^{ラスト}は言っ。

「お…なか…空いた。」

そして、また光を帯びて、？花の身体は変化する。

『フューチャー【親身一体】ああ!!』
「あ、」

「お腹すいた。」

式拾吸刀

7大罪の内の1つ。

グラトニー
暴食。

比較的？花の中の能力では1・2を争う温厚さだ。

ただし。

あくまでもそれは日常の事であって、食べる物が無くなると暴走状態になる。

「…くう。」

「…はあ？」

「…疑…？」

喰喰喰喰喰喰喰喰喰喰——！

『ぎゃぎゃぎゃ！？』

グラトニー
暴食は人形に手をあて、食した。

グラトニー
暴食の能力。

それは、？花の何処からだからでも口を作り、食す。

グラトニー
そんな事から、暴食の暴食モードと称されている…！

『「…痛い…」』

片腕を食いちぎられた人形は、八紘と一緒に後退し、呼吸を整えた。
「…喰う。」

ニヤリと不敵に笑う暴食はまるで動物を解体する料理人…いや、医

者のようだ。

「Oh!!shit!!!アリエナイ…」

アド…長いな、ハモンでいいか。

奴は空中にあるボートに出た、『LOSE・索道勾雪』の表記に吃驚している。

「早く片して違う子も負けさせなケレバ…」

「やってみな…」

地面にさして置いた太刀をひと蹴りし担ぎあげ、中断していた戦いにまた緊張が走る。

「oh…^{バキユーム}【吸収生物】…」

「…!!!」

か弱い生き物。

されどか弱い生き物にも、強い生き物は存在する。
【^{バキユーム}吸収生物】は、ある生物の混合種である…

「なっっ!!!」

分散し、^{バキユーム}仁の体に【^{バキユーム}吸収生物】は付く。
急いで【^{バキユーム}吸収生物】を落とそうとするが落ちない。

「…蛭か…」

「yes、蛭ですヨ」

その瞬間。

仁は予想外の行動に出た。

自分の皮膚ごと【バキューム吸収生物】を削ぎ落としたのだ。
仁の腕から。足から。

とにかく削ぎ落とした部分から、血が吹き出る。

「どうした…？来いよ。」

「oh！！so，demon！！」

不敵に仁は微笑んだ。

参拾刀

『「…嫌あああああ！！！！！！！！！」』

断末魔のような叫びが、全体に響き渡る。

八紘は相手してはいけない人（能力）と相手してしまった。

暴食が止まるには、何も食べるものを無くしてしまえば良いこと。
フューチャー

【親身一体】をこの場で発動した八紘の選択は、まさに“鴨が葱を背負ってくる”行為。

言わせてもらえば、能力の使い道が悪かったのだ。

『「まけましたからあつあああああああ！！！！」』

戦士として、八紘は屈辱を味わった。

「No！嘘でショウ…！？」

「本当だ、そして、俺はお前をぶっ潰す。」

「Ha！そんな体で何ができるって言うのデス？」

笑止ですネ、とハモンは笑う。

「ぶっちゃけ。お前をたたっ斬れば良い話だよな？」

「え」

だんだん仁は距離を詰めていく。

「や、止めまショウ！紳士的に！ここは私が負けますか―」

「遅いな」

その瞬間にアドウット・ハモンは首を斬られ…

「アハハハh、アハ、アハ」

「これで負け、だろ？あー殺したかった！」

WIN！錐崎・水谷・守城組！

参拾壹刀

試合が終わって、二人は俺に駆け寄った。

「あ、あの仁さ…、っ、なんで斬らなかったんですか？」

「あ？いいじゃないか」

「ふふふ、鈍いわぁ！？ちゃん！

あんな、仁はな…」

「夕暮ええええええ！！！」

「？…喧嘩はダメですよー？」

？花は何も知らず夕暮に殴りかかる俺を止める。

鈍いな。本当に鈍い。…きつと、俺よりも。

どうやら俺は恋してしまったらしい。

そして、相手が相手だけに前途多難みたいだ。

でも、必ず守ってみせる。

そして、俺は潜在能力をこの世から消してみせる…！

参拾貳刀

「ああ…、つまらないね」

藍季は椅子に座り、ワインを口に含んだ。

どこともいえず、どこか見たことのあるような、そんな曖昧な暗い部屋の中に4つの影が浮かぶ。

「やあ、同級生。」

『あの方』から連絡がきたよ」

どこか一方通行な話を藍季はする。

「ちょっと待てよ。」

死にかけていた奴が？」

「無礼な口をつぐんで欲しいね、錮皇」

「事実だろ。」

藍季は『あの方』に能力を与えられたときから『あの方』を深く信仰している。

それは3人が分かっている事であった。

「で、何だっただ？」

「ある2名の生徒に興味があるらしいよ」
クスクスと、藍季は笑う。

「守城？花と、水谷夕暮に、ね」

異様な空間の扉を閉めて、俺は家に帰る。

自分が殺そうとして自分が殺された奴に興味を持つとは意外だ。

『あの方』、それは人間の第2の始祖。

現在の名は「粕谷優^{そめやゆう}」であり、本名を『Noah^{ノア}』と言う。

参拾貳刀（後書き）

これを投稿するあいだ、2回データが吹っ飛びました。
リアルに泣けました。

参拾刀突破ありがとう！

回を重ねることに方向性が不明になってきているこのごろです。

参拾参刀

「win!! 樞、夏目、戎谷チーム!」
ビュン、と“夏目”と言う剣士が剣についた血を拭い、鞘に納める。

「凄腕の剣士、ですね」

「でも、次は勝てへんかも・な!」

夕暮がクスクスと笑っていた

「ああ、なんせ2年連続優勝チームがいるからな」

仁さんがある3人に指を指す。

「明日の初戦。よく見とけよ」

「終音ちゃんしゅうねと来ちゃんらいと智ちんともが出てくるんやからな!」

「智ちん…?」

「その呼び方はやめろって何度も言ってるだろ」

「え…?」

「智!」

仁さんが薄い茶髪の男に近寄る。

クールそうな仁さんと、チャラそうなその人との見た目のギャッ

プがとても浮き立つ。

「…智、何…話始めた…」

「あ!来ちゃん!」

「…夕暮…」

とても背の低い女の子が嫌そうな顔をする。

「はいはい、止めーや！」

パンパンと手を叩いて、もう1人女の子が上から階段を下りてくる。

珍しい、色素欠乏症アルビノの女の子だ。

「はじめまして、うちは、初終音はじめって言います」

あっけにとられていた私の前に、終音さんが立つ。

「あ、初めまして！守城？花です！」

「よろしくな！ほら！二人とも！帰るよ！」

「…了解はい」

「はいはい！」

さらにあっけにとられた。

「終音ちゃんと智ちゃんは剣士で、来ちゃんは銃士ガンマンやで！」

いつの間にか夕暮が隣にいた。

「去年、クラスが一緒だったんだよ」

「あ、仁さん！そうなんですか」

「まあな、よう考えればあのチームが1番強いって言われとんな…」

「！」

最強のチーム…か。

今日会ったのがその3人とは、驚くしかない。

参拾死刀

「相変わらずだね、僕の創った学園は。」

「その様で御座いますね、Noah様」

目立つ印象を与えない優男が、隣に立つモデルのような女性と話す。

「どうやら、バトルシップという戦闘行事が行われている様で御座います。」

「じゃあ、編入はその後、かな。一旦遊びに街に出よう」

「…御意。」

不穏な空気を見に纏う二人は、とりあえず学園を後にした。

「ふええ…すごいわあ…!!」

「この位い、当たり前ええ!」

どや顔を決める人形（原罪）とその横に夕暮が立っていた。

対戦後の暴食を止めるのは、骨が折れる程だった。

満腹状態にするため、まずは仁の怪我を喰い。そして救護塔の怪我人の怪我を喰い。

ようやく暴走が解けた。

「夕暮はん。アンタもおお、怪しいなああ」

「ふええ？秘密だよ」

ニヤニヤと二人は笑いあった。

参拾御刀

「win!! 樞、夏目、戎谷チーム！」
ビュン、と“夏目”と言う剣士が剣についた血を拭い、鞘に納める。

「凄腕の剣士、ですね」

「でも、次は勝てへんかも・な！」

夕暮がクスクスと笑っていた

「ああ、なんせ2年連続優勝チームがいるからな」

仁さんがある3人に指を指す。

「明日の初戦。よく見とけよ」

「終音ちゃんしゅうねと来ちゃんらいと智ちんともが出てくるんやからな！」

「智ちん…？」

「その呼び方はやめろって何度も言ってるだろ」

「え…？」

「智！」

仁さんが薄い茶髪の男に近寄る。

クールそうな仁さんと、チャラそうなその人との見た目のギャッ

プがとても浮き立つ。

「…智、何…話始めて…」

「あ！来ちゃん！」

「…夕暮…」

とても背の低い女の子が嫌そうな顔をする。

「はいはい、止めーや！」

パンパンと手を叩いて、もう1人女の子が上から階段を下りてくる。

珍しい、色素欠乏症アルビノの女の子だ。

「はじめまして、うちは、初終音はじめって言います」

あっけにとられていた私の前に、終音さんが立つ。

「あ、初めまして！守城？花です！」

「よろしくな！ほら！二人とも！帰るよ！」

「…了解はい」

「はいはい！」

さらにあっけにとられた。

「終音ちゃんと智ちゃんは剣士で、来ちゃんは銃士ガンマンやで！」

いつの間にか夕暮が隣にいた。

「去年、クラスが一緒だったんだよ」

「あ、仁さん！そうなんですか」

「まあな、よう考えればあのチームが1番強いって言われとんな…

！」

最強のチーム…か。

今日会ったのがその3人とは、驚くしかない。

参拾麓刀

「みんな注目の3年連続チャンピオンの登場よおっ！……！」

一夜たって、昨日会った3人の初戦が始まった。
まさに瞬速。

そのチームの終了時間は1分。

「は…速い…」

思わずモニタールームで観戦していた私は、声をあげた。

「終音の為の作戦、みたいやで。」

夕暮さんが横から顔を覗かせた。

「あ、あの…、色素欠乏症だから紫外線に弱いって事です…か？」
アルビノ

「まあ、そういう事やで」

「それが唯一の欠点と言ってもいい。」

仁さんが下を向く。

「準備、しましうか」

「花が無理に笑う。」

「次ですよ…？」

「せやせや！やるで！」

「…ああ。」

2人には、全く叶わないな。と思い俺は重い腰を上げた。

参拾斜刀

「やあやあやあ、ひ、ひひっ」

「絶くん、驚いたやないの！」

「ふふ、ふーや、やだね、水谷！」

「いやあ、相変わらず…やねえ…」

不気味な笑みを浮かべる、そのチームのリーダーらしき人物。
…チームも不気味なんだけど。

「第5回戦の会場はっ！なんと体育館っ！！

チームはお分かりの通り！！

ではでは、Ready fight！！」

コングの音が高らかに鳴り響く。

「最初に行かせてもらいます！原罪！」

『はiiiiiiii』

刀を下げて私は走る…！

が。

「ぶえ」

何かにぶつかり、歩みを止める。

あ、奇声も上げたけど。

体育館の床から手が出ている。

「原罪！」 私は、刀を本抜いて原罪に向かって投げた。

『はいなああああ』

原罪が刀で手を斬る。

「あ」

ヤバイ、これは不離だ。

体育館の床がめくれ、私目掛けて、倒れてきた。

参拾捌刀

「だあいじょうぶかあい??ちゃん!」

「一端立て直すぞ」

慌てて原罪の力で、自らの回りを囲んだ。

「…すいません、2人とも…」

「あいつらも、潜在能力を使つてたな…。1人か?」

「いいやあああ。2人だよおお!」

原罪の話を聞きながら落ちついて、呼吸を整えた。

「原罪はん、能力名と効果は?」

「多分ん、1つはあああ【死者の手】アンデットハンド おお!

効果はあああ、どこからでもおおお、手をだせるううう」

初めに私がくらったあの技だ。

「2つ目はあああ、【しんぐい跪器具】だと思つうう!!」

全てのモノをおお、自分の下僕として扱えるううう!!」

「厄介やんなあ…。流石は、不幸のチームやねえ。」

「ああ…。」

夕暮さんと仁さんがため息をつく。

「あ、あの私がおとりになります!」

参拾吸刀

「だめ」

「うつ！なんですか！？」

夕暮さんはデコピンまでしてくる。

「でも、これが一番いいはずですよ！！確実に能力者を1人ずつとめれる！！」

「でも……」

「やらせて下さい！！」

私は、息をのんだ。

仕方ない、と言うように仁さんは立ちあがった。

「今回だけだから」

原罪の作った、仮想空間からみんな出た。

「【傲慢^{プライド}】。」

【傲慢^{プライド}】に私は適応し始める。

髪は金髪で、縦ロールに。手には扇子。

「さあ、ここからが本番ですわよ！」

【傲慢^{プライド}】は天高く扇子を上げた。

肆拾刀

「不離、無声い、いつも通り、やろお」

「絶」

愛尾不離あいお ぶりと言うチーム内唯一の女の子が、リーダーの名を呼ぶ。
「らしくないね。」

ふう、と一息不離は吐く。

「不離、何、て？」

「らしくない。絶、何かされた？」

不離が絶に近寄る。

「止め。落ち着き。」

僕が声をかける。

「『卑怯でも、勝つ。弱くても逃げない』誓った。目標。」
コクコクと僕は頷きながら言う。

「失念、してた、ああ、勝とう」

絶が呟き、手を地面に着けた。「【跪器具しみぐうつ】」

ボールが人形になり、従順な奴隷へと化し、相手へと向かっていく。

「【死者の手アンデットハンド】」

僕も、絶に続いて能力を発動した。

肆拾壹刀

「ひれ伏しなさい!!」

【傲慢^{プライド}】は、そう言いながら扇子で人形を切り刻む。人形はボールへと変わり、そして粉々になっていく。

私の足元に【死者の手^{アンデットハンド}】が現れ、足を掴む。
…のを、直前で回避。

「うっ」

相手の1人が夕暮さんの狙撃で倒れこむ。その間に、私は何発か風を撃ちこんだ。

すると、頭に鈍痛が。

【死者の手^{アンデットハンド}】が、バットをもって私の頭を殴っていた。扇子でその手を切り刻み、頭に手を添える。思ったより血が出ている…。

「…このままじゃ…だめ…ですね…。」

『え!?! ああああ!?!』

【傲慢^{プライド}】さん、ありがとうございます。」

「え、ちよつと・・・、やめときなさいよ」

「出てきてください…っ、【強欲^{グリード}】さん!?!」

「?ちゃん!?!」

夕暮さんの声が遠のいていく。

ここからは能力任せ、だ

私の中で、第2の問題児。

でも、仕方ない。

彼は1番この戦いに向いている…!!!!

肆拾貳刀

【強欲^{グリード}】になっても、私の姿は何も変わらない。
ただし…！

「ああ、その能力！容姿！才能！人望！家柄！
全て欲しい！！なにもかもなあ！！！！」
強欲になる以外は。

「俺の本にある258個の能力よりも便利だ！！」
ハハハハ、と悪人のような笑いを【強欲^{グリード}】は浮かべる。
「援護してくれよ、夕暮ちゃん」

「あ？はあ…」
ニヤ、と少し笑って【強欲^{グリード}】は本を片手に持ち、走りだした。

【死者の手】の攻撃をすり抜け、術者を1発で沈めた。
5678個の内の1つ！【無視回避^{スロースルー}】！！」

絶くんは、仲間が倒れたと言うのに、何も気にせず戦う。
そして、回り込んだ仁さんとの一騎打ちとなった。

「悲しくないのか」

「別に」

「苦しくないのか」

「全然」

「寂しくないのか」

「思わな、い！！！！」

ゼエ、ハア、と絶くんは息を切らせる。

仁さんは、相手を泣きそつな目で見た。

私は【七大罪^{つみ}】を解除した。

肆拾参刀

血を吐きながら、ボロボロになった死野は立ちあがった。
俺は攻撃の手を休めた。

「まだ、だ、やれる」

「死野……」

「見、下すな、優秀者^{エリート}」

「……」

優秀者^{エリート}なんかじゃ、俺は無いよ。

そう俺は言おうとして、でも何故かつつかかって。止めた。

「お前ら、は、幸せ、そんな顔、して！

僕ら、を！不幸、にする！

満足、か！？」

「…違う、死野。」

「違わな、い！

除外されて、

疎外されて、

暴力振るわれて！

僕ら、は！被害者だ！」

「そう思っているのはお前だけみたい、だぞ？」

「うるさい、煩い、五月蠅い、ウルサイ、うるさい！！！！！」

「努力しろよ、少しは変わる」

俺は柄で死野の首を思いきり叩いた。

肆拾死刀

「僕は君を可哀想とは言わないよ」

ノア
Noah様は言った。

「世界を跪かせばみんなも思わないよ」

貴方は、嘘を、虚偽を、言って？え？

「絶、らしくない。」

「僕らは弱くても負けても笑おう」

「「絶」」

これが、仲間か。

僕の、俺の、欲し、かった…

「気を、付けろ、ちっちゃい、の」

「え？私ですか？」

絶は？花を指す。

「Noah様、否、Noahを、狙って、る」

…？Noah？」

「あああ。失念したよ、同士。

絶くんの能力はNoah^{ほく}から産まれたのに。」

高見から観覧していた理事長・藍季は呟く。

「Noah様も居ない、僕がこの学園を統べる。
学園主にならなければ。」

心頭した瞳で藍季は更に眩く。
もはや、藍季の面影もない。

「同士達にがんばってもらわなきゃね。

僕らは1つなんだから。」

フッフ、と不気味な笑いを藍季は浮かべた。

理事長室には、不気味な影が幾つか笑い声と一緒に揺れていた。

肆拾悟刀

「つ、疲れました…」

ふう、と私は一息吐いた。

「まあ、次が決勝やからな！」

明日なんやで！と、陽気に夕暮さんは言う。

「俺は休むが、二人はどうする？」

「私は準決勝を見えます！」

そう二人に告げて、会場が映されるモニターへと私は向かった

「おい、夕暮。

お前も使っているんだろう？潜在能力を」

「なんのことやら」

ケラケラと夕暮は笑う。

俺にも、少し分かってきた。

コイツも能力者だと言う事が。

「ああ、仁には、もうええか。」

「は？」

「？ちゃんには内緒やで。嫌われとうないからな！」

「僕の能力は【ミラージュ蜃気楼】」

幻術よりも強い催眠によって、いろいろ誤魔化したりする能力だそうだ。

「そして、僕は女の子だよ！仁！」

肆拾麓刀

そんな会話を二人がしている時。

同時進行で、？花は試合を見ていた。

夏目・樫・戎谷VS和泉・桃刀・初

場所は技術科室。

なにやら整った容姿の夏目という相手方のリーダーが、和泉さんと向かい合って話をしている。

そして、コングの音とともに、試合が始まった。

流石、準決勝。

いや、もはやこれが、決勝かと思うくらいだ。

お互いに一步も譲らない戦いとなっており、観客も思わず息を飲む。

終音ちゃんと、智さんの激しい攻撃に相手もよくついていつている。

その時、相手の夏目が一言。

「もういいか」

「—え？」

予想外の結果が、私の身を貫く。

あの3人は——

能力者だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9491r/>

。鈍。

2011年10月26日14時01分発行